

絵本にみる交通

延藤安弘*

本稿のねらいは、世界の絵本の中に描かれた交通を読みとり、その歴史的文化的コンテクストの諸相をおさえ、交通システム・交通生活のありようについて豊かな想像力の翼をひろげる一助にすることにある。都市絵本に描かれた交通、交通絵本にみる車の歴史と同時代の交通生活のディテール、物語絵本にあらわれる市民がケーブルカーを守る運動、リスク・マネジメントを問い正す表現内容、楽しい仕掛け絵本、等について考察をすすめている。

Transportation in Picture Books

Yasuhiro ENDO*

The aim of this paper is to examine transportation as depicted in picture books of the world, pin down the various phases of the historical and cultural backdrops thereof, and utilize the observations thusly discerned as an aid toward unlocking the door to an imagination rich beyond doubt in regards to the state of our transportation systems and transport practices. Traffic depicted in a picture book of cities, the history of the automobile as viewed in a picture book on transportation and particulars of the transportation habits of that age, a campaign by the citizens of a city to save a cable car system from ruin and the wording of expressions inquiring into risk management described in a picture book of stories, amusing fold-out picture books, et al., have all been promoted for consideration.

1. はじめに

「絵本なんて私たちの年頃の子が見るものかなと思っていましたが、難しい言葉でだらだらと文が書かれたものを読むより、むしろ印象強くわかりやすいと感じました」

これは、学生たちに絵本を通して住まい・まちづくりを伝えんとする時、スライドによって語りかけた際の一人の学生の印象である。「絵本なんて…」という言い方は、絵本に対する大多数の大人世代の共通したとらえ方である。

しかし、10数冊の海外の優れた絵本の中に描きとられた住まい・環境・都市を、鮮明な映像を写し、そ

れに適当なコメントを付していくと、視聴した人々の間からは「絵本は夢を見させてくれると同時に現実を見つめなおすということもさせるものだ」という感想がもれきこえてくる。

かつて、世界の絵本の中に住まい・まちづくりの発想を解説しつつ、絵本を手がかりにしつつ私なりの住環境観を述べた拙著をまとめたことがある¹⁾。何故、住まい・まちづくりと絵本をクロスオーバーさせるのかについては前著で述べたのでここでは触れないが、それに対して、予想以上に多くの批評が寄せられた。「絵本という、いわば地図にもあたるものをもとに、現在の住文化をさぐるというアプローチはユニークである」という評にもあらわれているように、絵本を道案内にして、同時代の都市・環境をめぐる文化を語ることは意味あることである。

本稿では、絵本の中に描かれた交通を読みとり、その歴史的文化的コンテクストの諸相をおさえ、交

*熊本大学工学部教授
Professor, Faculty of Engineering,
University of Kumamoto
原稿受理 1991年6月28日

通システム・交通生活のありようについて豊かな想像力の翼をひろげることの一助にできればと思う。

2. 都市絵本にみる交通

絵本には知識絵本と物語絵本がある。

前者は、知識を正しく客観的に伝える類の絵本である。他方、後者は、ある主題をドラマにして、それに絵とことばを与えることによって展開するもの

を言う。まず、交通を扱っている知識絵本の典型をとりあげてみよう。

イタリアのピエロ・ヴェンチュラは自分の子どものために『都市の本』(Book of Cities)²⁾を創った(Fig. 1)。それは、「アテネ憲章」(1933年)による都市の4つの機能(住む、移動する、働く、楽しむ)にしたがって、それらの生き生きとした姿を世界の各都市に求めて描いた絵本である。

「移動する」=交通については、5つの具体的なシーンを描いているが、その前文には次のような言葉が記されている。

「都市はあまりにも混雑しているので、交通は非常に切実な問題です。市民は、働きに行くのにどんな手段でいけるのでしょうか。(職場まで何マイルも移動しないといけない人々がよくいます。)毎日都市にどれだけのモノや食物が運ばれているのでしょうか。

都市の道は、いつも車であふれています。乗用車、トラック、バス、タクシーが走る場所のとりあいっこをしています。列車、汽船、飛行機はコンスタントに市民を都市の内外に運んでいます。

道路上の交通を減らすために、多くの都市で地下鉄を導入しています。道路の混雑からのがれるために、都市間、及び都市周辺を移動する高速道路網もあります。……」

というように、都市交通の問題のありかがやさしく説明されている。

頁をめくってみると、赤い2階建てのバスやトラックや乗用車が団子状になっている絵がでてくる。

ロンドンの交通渋滞を描いているのかと思ってよく

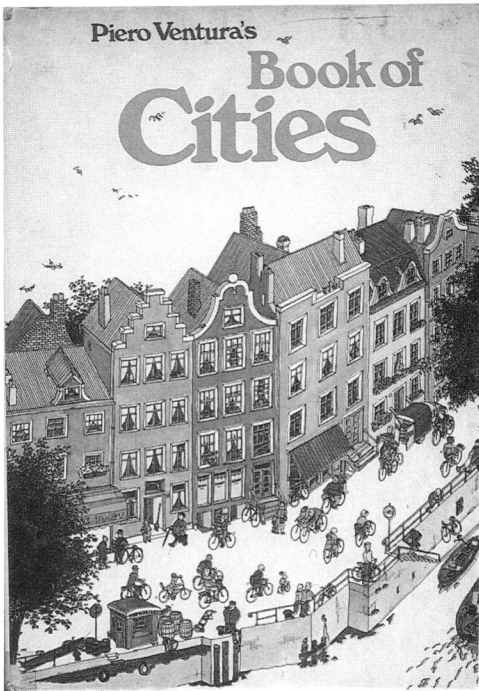


Fig. 1 『都市の本』の表紙

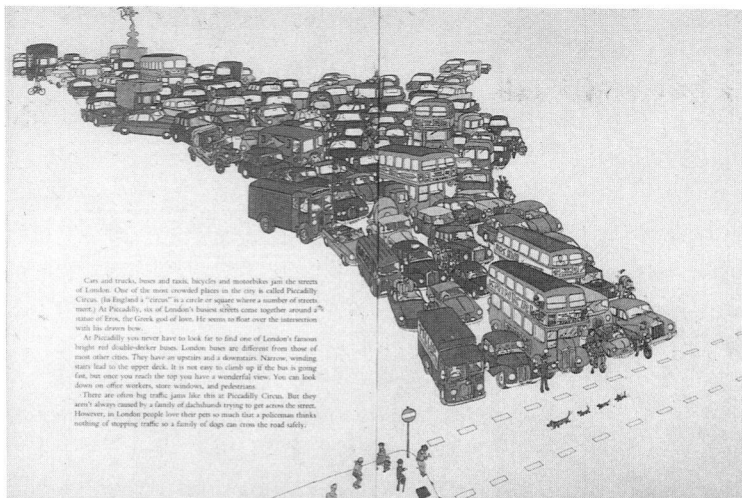


Fig. 2 ピカデリー・サーカスの交差点を通るダックスフントの家族

みると、手前に、ダックスフントの家族が交差点を渡っているところである(Fig. 2)。ロンドンっ子はとても大好きであることを知っているおまわりさんは、躊躇することなくピカデリー・サーカスで大量の車を止めているのである。ここには、大交通渋滞に対して怒りをあらわにするのではなく、市民の動物たちへのやさしい感情が対比的に示されている。

次いで、ニューヨークの地下鉄。落書きアーティストの若者たちによって車体に字や

絵が描かれている。駅でホットドッグを買う人や、おみやげに花を求める人等、乗降客の仕草がきめ細かく描きとられている。

3番目はロス・アンゼルス的高速道路。公共交通機関が乏しく、とりわけ地下鉄のないこの都市では、ほとんどの市民が1台ずつマイカーを持ち、一家に2~3台ある家庭が多い。ドライバーは、対向する車の光をみることなく、都市を通過できるように、高速道路網は街路の上と下を往き来している。その仕組みは、時にはまるで地球以外の星の複雑な十字型模様のようにみえる。

4番目に登場するのはベニス。ここは1台も車のない都市。島の上につくられたこのまちでは、運河が道路の役割を果たしている。水上をボートで移動するベニスは、世界中で、最も素敵な町の1つであると作者は記している。近年は、伝統的なゴンドラという底が平べったいボートは、モーターボートにとってかわられつつある。ベニスは愛らしい古い教会や美しい橋や、人々がたくさんよりつく店や屋台の町である (Fig. 3)。

最後に西ドイツの産業都市。エッセンやデュッセルドルフでは、工場働く人々が郊外の家々に帰るのに、道路上の交通を邪魔しない高架鉄道を使う。退社時には、建物からあふれるようにでてくる人々のうち、車で帰る人はほんのわずかであり、ほとんどの人々は電車で帰る。

このように、複雑な線描ときらめくような色彩と、驚くばかりの観察眼のゆきとどいた人々の動作・仕草によって、この絵本は世界各地の都市の人々が、どのような交通手段を使い、どのような交通生活様式のもとにおかれているかが手にとるようにわかる。1冊の都市絵本の中の交通の頁を見ただけで、都市内の動くシステムとスタイルについての課題意識が触発される思いがする。

3. 車の歴史の流れと細部を楽しむ

アメリカのハック・スカーリーは、自分の愛犬のために(作者よりももっと車好きの犬らしい)、“On

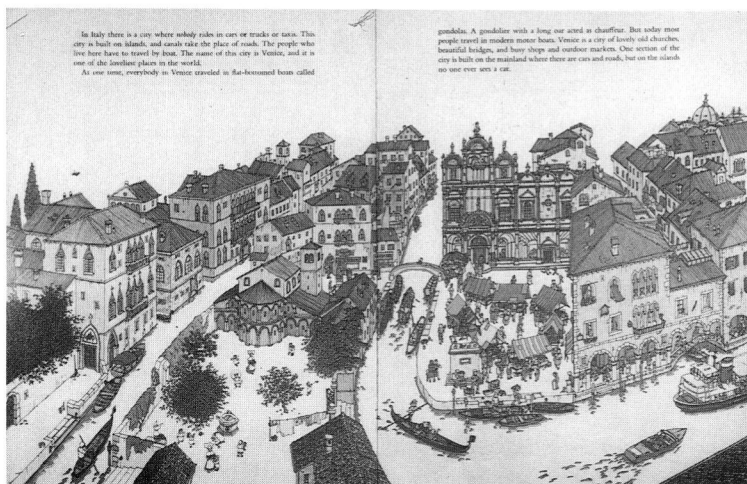


Fig. 3 車が1台もないベニス

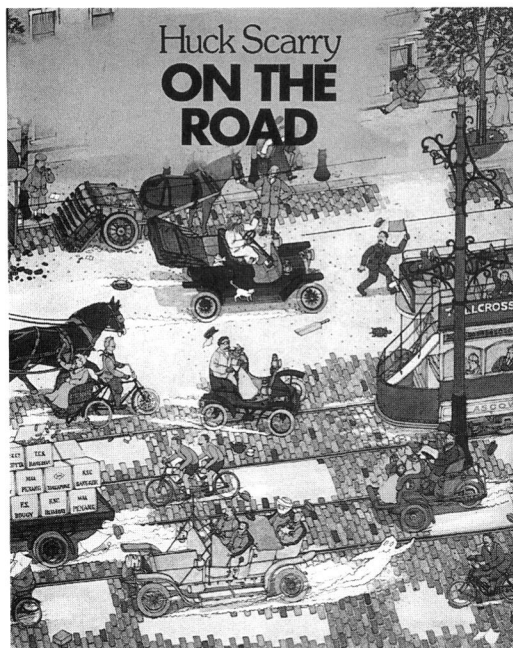


Fig. 4 車の歴史絵本の表紙

the Road” という、車の歴史の絵本をつくった (Fig. 4)³⁾。

そこでは、自動車の誕生の初期 (1878-1898年) の状況は次のように記されている。

「たった100年前にはまだ車がなかった。長い旅のためには人々は汽船に乗るか、馬に乗るか、馬車に乗った。しかし、各国の創造力豊かな発明家たちは、馬車に小さなモーターをつけることを試みた。車は自力で動き出したので、それは「自動車！」 (“Auto-

mobiles!”)と呼ばれた。」(Fig. 5)。

Fig. 5 中には、初期の自動車が様々な形態・規模のものがあつたことをうかがわせる。ドイツのダイムラー・モーターサイクル(1885年)、同じくベンツのモーターつき三輪車(1885)、オランダのハメル・カー(1887)、アメリカ最初の車のthe Duryea(1893)、ヘンリー・フォードの最初の車(1896)etc. が、作者と愛犬が乗ったジープがかけぬけていく両脇に登場する。

興味深いことには、車が発

明されるや否や、普通に乗るよりも先ずレースに使われ始め、どの車が最も早く信頼性があるかが競い合われたのである。最初のレースは都市間の公共道路上で行われ、見物人たちはスピードをあげて走る車に歓声をあげて見たという。

世界最初の自動車レースは、1894年にパリとルアン間で行われ、勝者は、De Dion蒸気車であった。この時の平均スピードは10MPH。1902年には、ヘンリー・フォードのレースカー「No. 999」は何と100MPHで走ったという。

世界最初のグランプリレースは、1906年にフランスのルマンで行われ、ルノーが勝った。それが、今日世界の車ファンの関心の的のレースのひとつとなっている。

車が普及し始めた頃は、まだ道路は舗装されていなかった。車とトラックは砂塵を巻き上げて走っていた。だから車に乗る時には、大きなコートをはおり、帽子・手袋を着用し、目にはゴーグルをはめることによって、前方をはっきり見えるようにした(Fig. 6)。

この絵本は、さらに、1895-1914年のイギリスの乗用車とトラック、同1911-1929年、フランス：1911-1921、ドイツ・スイス：1910-1929、米国：1911-1925、イタリア：1911-1926、フランス：1919-1927、グランプリレーサー：1920-1929、といった調子で各国の車発達史を追いかけている。ここでは、単なる車の様式や技術の展開をトレースするのではなく、各都市・時代の交通背景、ドライバーのスタイル、同時代の乗り物も表現されていて興味

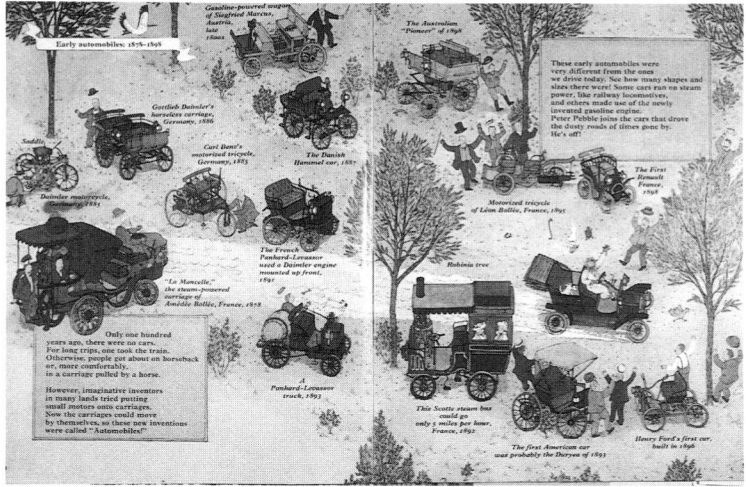


Fig. 5 車は自力で動きだしたので「Automobiles！」

がつきない。とともに、各画面には細部の意外性を発見する楽しさがあふれている。

例えば、20世紀初頭のイギリスの都市では、石舗装だったため、車が走り抜ける時にガタガタと大きな音をたてて走っていた。そのことを示すFig. 7中の下中央を走るロールス・ロイスのシルバー・ゴースト(1907年)は、白い亡霊のごとき表現の騒音を発している。その周りには、二人乗りレース用自転車や、Singerの三輪車や、Holdenのモーターサイクルが走り、その横では女性が乳母車を押している。トラックの積荷がぐずれ、ビスケットが路上に散らばっていたり、2階つきのトロリーカー(1898年、グラスゴー)の女性車掌さんは切符自動販売機(ディスプレインサー)を持っている(1914年)、といったおかしさや意外さが目につく。

絵本をみる楽しさの一つに、細部の面白いユニークな表現の発見があるが、この絵本にはどのページ

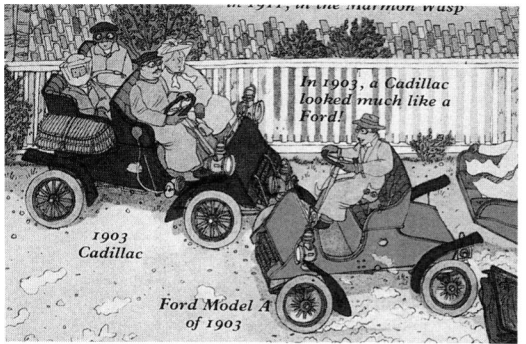


Fig. 6 路上の砂塵を防ぐためにゴーグルをはめて車にのった

にもそれが巧みに描きとられていて、みていてあきない。これは、一般的な通史的表現をこえて、車が近・現代社会にどのように登場し、どのように育っていったかの流れとともに、同時代の各都市における交通生活の遊び心に満ちた魅力あるディテールをきちんとすくいあげた絵本として、ユニークである。

ハック・スカーリーは、この他にも交通関係の絵本を数冊創作しており、交通絵本作家といってもよい⁴⁾。

4. イメージの現実性

わが国でのこの種の交通の歴史を体系的にあらわした絵本としては、神崎宣武の力作がある。『道の発達とわたしたちの暮らし⁵⁾』の表現が示すように、山、川、海との関わりでの道、及び、近代の鉄道や道路の歴史と人々の利用の仕方・暮らし方について、全5冊にわたり詳らかにしている。絵と文が半々である構成は、先のスカーリーのような絵中心のそれとは異なるが、小学校中・上級以上用の知識絵本としての内容の密度は高い。

幼児向け知識絵本の中で、交通をとりあげているものは少なからずある。山本忠敬作の『しょうぼうじどうしゃじぶた』、『とらっくとらっくとらっく』、『はたらくじどうしゃ①②③』等⁶⁾は、幼児のための絵本が持つべき条件の一つを具体化している。即ち、それらはイメージの現実性を鮮やかに示すものとして絵本作家・研究者の渡辺茂男は評価している⁷⁾。同氏のお子さんは、生後10カ月頃から乗り物に強い関心を示しはじめ、2歳になる頃までに、これらの自動車の絵本とすっかりなじみになったそうである。彼が必ず強い反応を示したページは、乗り物が1台だけでなく数台以上描かれているページであった (Fig. 8)。

1台だけ描かれたページよりも、複数台描かれているページが、幼児の興味を強くさ

そったのは、現実のまちの中で、子どもの目がとらえているのは、まさに多種多様な沢山の車の流れであるからである。1台の乗り物への静態的な関心よりも、多くの車が流れる動的な交通空間への反応が鋭いことは、幼い頃から現実の都市空間、生活空間の影響が非常に強いということがわかる。

絵本がみる者の内的世界と現実の外的世界とをとり結ぶ役割を果たすものと考えれば、現実そのものの表現だけでなく、現実に着地しつつ、しかし同時に現実を乗り越えるイマジネーション豊かな表現が絵本に求められる。そこに、現実そのものの伝達をになう知識絵本とは別に、想像力の翼をひろげる役割を果たす物語絵本に光をあてなければならない意味がある。

5. 市民がケーブルカーを守る

そこで、次に物語絵本の世界にふみこみたい。交通を取り上げた物語絵本の傑作を1冊あげよといわれれば、迷うことなくアメリカのバージニア・リー・バートンの『小さいケーブルカーのメーベル⁸⁾』をあ

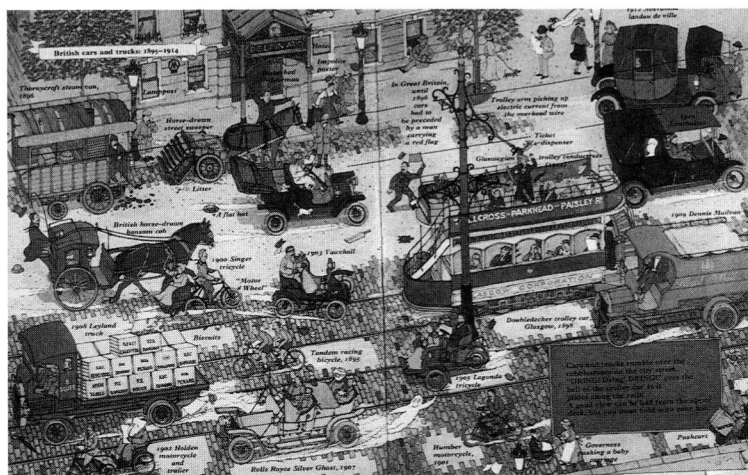


Fig. 7 「シルバー・ゴースト」(ロールス・ロイス)は白い亡霊のような騒音を発して走っている

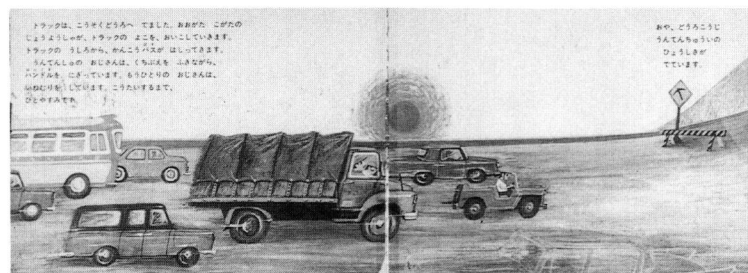


Fig. 8 複数の車が走ることに子どもは強い関心を示す



Fig. 9 「ちいさいケーブルカーのメーベル」の表紙

げたい (Fig. 9)。

サンフランシスコにはじめてケーブルカーが走ったのは1873年。発明者はハリディという動物好きな人。雨の日には、坂の多いサンフランシスコでは馬車を引く馬が急な坂を登ろうとしてすべったりころんだりしているのを見て、彼はかわいそうに思い、ケーブルカーを発明した。1906年大地震の後、ケーブルカーは電化され、さらに時代の流れの中で、電車やバスやトロリーがケーブルカーにとって代わるようになっていった。

1952年に出版されたこの絵本は、そうした都市の乗り物が世の中の進歩にゆきぶられ、廃止寸前に追い込まれたケーブルカーが、市民運動によって守られたという史実をもとにしてかかれたもの。

主人公のメーベルはケーブルカー (Fig. 10)。ターンテーブルで回転し、循環式ケーブルで時速14kmで走り、前車輪ブレーキはペダルで、後車輪ブレーキ

はレバーであることなど、ケーブルカーの構造や動かし方が明示されているので、乗り物好きの子どもはひきつけられるものがある。

メーベルは一日の走行の後に仲間のケーブルカーと思い出話をした。メーベルと仲間たちは町のために働いた。でも、まちは大きくなるのに夢中で、ちっぽけなケーブルカーのことなどかまわずペンキもぬりかえてやらなかった。やがて、時代の趨勢としてケーブルカー廃止を議会で決めることになった。「さびしくなるなあ、この町からケーブルカーがなくなったら、ほかの町とおなじだ」とある人がいった。けれども、別の人がいった。「とんでもないわ。わたしたちの町でしょう？ それはわたしたちで決めましょうよ」と。有志の人々は「サンフランシスコのケーブルカーを守る市民の会」をつくり、住民投票でその存続を問うべきであると市役所に申し出る。それには請願署名が必要だとわかったので、人々はさっそく署名を集め、メーベルたちの運命は住民投票にかけられることになった (Fig. 10)。市民たちは、賛成派と反対派にわかれて運動を繰り広げ、とうとう投票の結果3：1でケーブルカー存続賛成派が勝った。

「みんなはメーベルのまわりに集まって、メーベルを花で飾ってやりました」のページにくると (Fig. 11)、熱いものがこみ上げてくる程に、ケーブルカーをこよなく愛する市民がそれを守りお世話するという感動的な物語。

ここには、ケーブルカーのメカとその誕生と活躍、存続をめぐる市民運動が描かれており、これは「交通歴史物語絵本」の典型である。

作者のパートンが、ケーブルカーを擬人的に表現し、「物」のケーブルカーと人間がやさしい感情を交わらせるように描いていることによって、みる者は、ケーブルカーの立場になったり、廃止反対運動に身を乗り出す市民ひとりひとりの立場になったりし、主人公たちとの一体性の高い感覚にみまわれる。

ペン画淡彩で、軽快に楽しく物語を展開させながら、民主主義の手続き・原理がわかり、ここには「政治用語は一つも使っていないが、それだけでアメリカのコモンセンス、

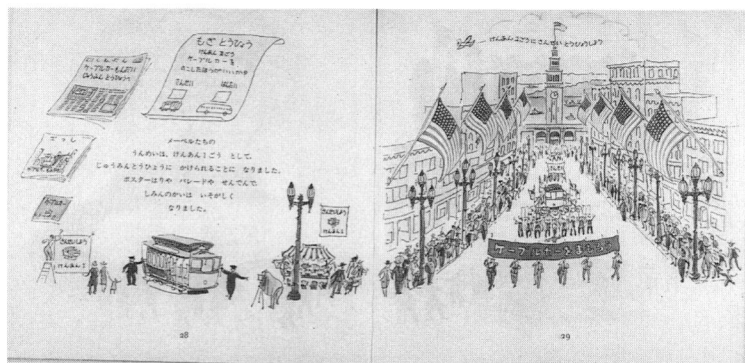


Fig. 10 住民投票でケーブルカーの存続を問うことになった

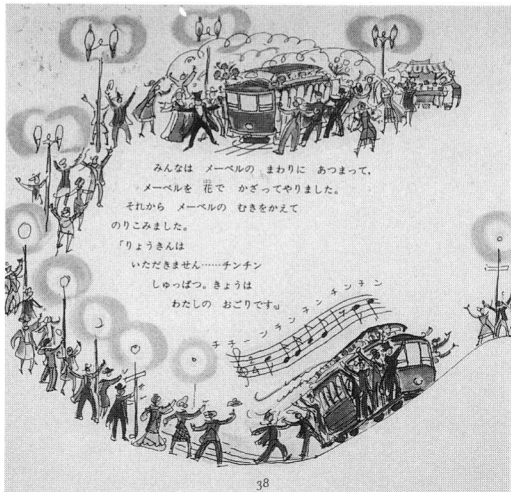


Fig. 11 「みんなはメーベルのまわりに集まってメーベルを花で飾ってやりました」

それから民主主義や市民意識についてバートンが非常に強い関心をもっていることがよくわかる。」⁹⁾とともにそれは、古いもののもつ価値を認め、歴史と未来を融合するまちづくりの柔らかない視点を提供している。

6. リスク・マネジメントを問い直す

バージニア・リー・バートン (1909-1968) の作品のなかでは、環境変化の問題を鮮明に描いた4作目の『ちいさなおうち』¹⁰⁾が最も有名であるが、彼女は先にあげた絵本以外に数冊の広い意味での交通絵本を創作している¹¹⁾。

その中で、いまひとつの傑作絵本として強く推薦したいのは、『はたらきもののじよせつしゃけいていー』¹²⁾である (Fig.12)。子どもに読んであげるなら4歳から、自分で読むなら小学生初級向きであることは、先の『メーベル』と同じであるが、それが大人にも深い意味をなげかけていたように『けいていー』も同様である。

「けいていー」は、キャタピラのついた赤い立派なトラクター。引く力は55馬力もあることとその性能が明示されている点は、先の絵本と同じである。「けいていー」は、じょおぼりすという町の役所の道路管理部に勤めていた。この町の各種公共・民間施設にアクセスする市民の利便性を確保するために、「けいていー」は冬の間は除雪車として町中で活躍するという話の展開の中で、夏の間はブルドーザーとして、道路維持の作業をする、という画面がある



Fig. 12 『はたらきもののじよせつしゃけいていー』の表紙

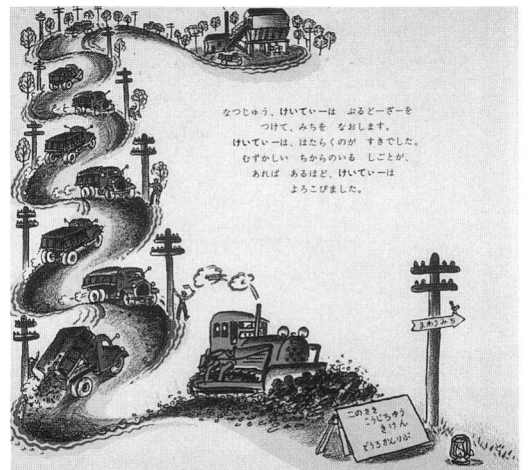


Fig. 13 道路工事中のけいていー

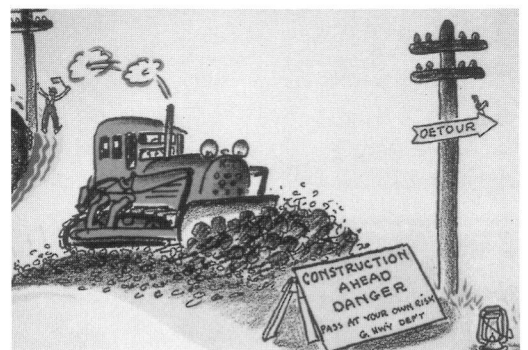


Fig. 14 工事場所の看板 (英文)

(Fig.13)。

ところで、この絵本の日本語版を見ていて、ふと何となく気がかりになり、原本をあけてみた (Fig.14)。そして、工事場所の看板中の文章を対比してみ

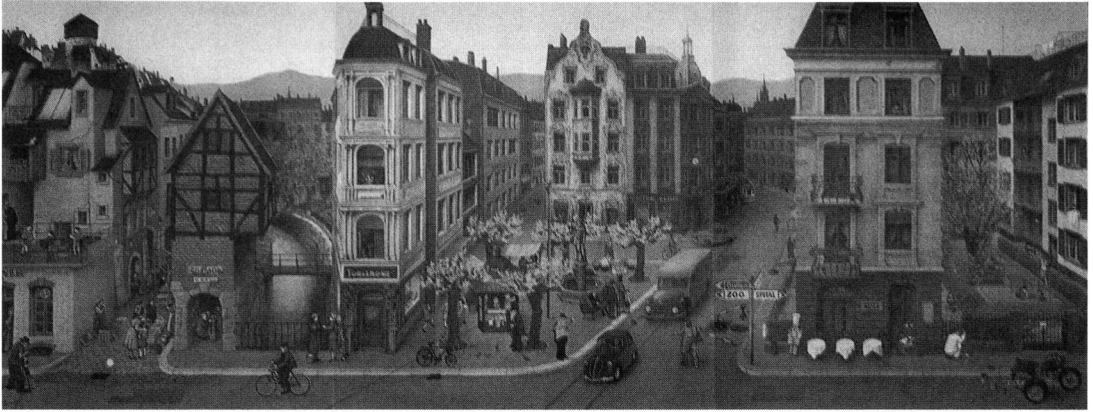


Fig. 15 1953年5月6日のまちかどの光景

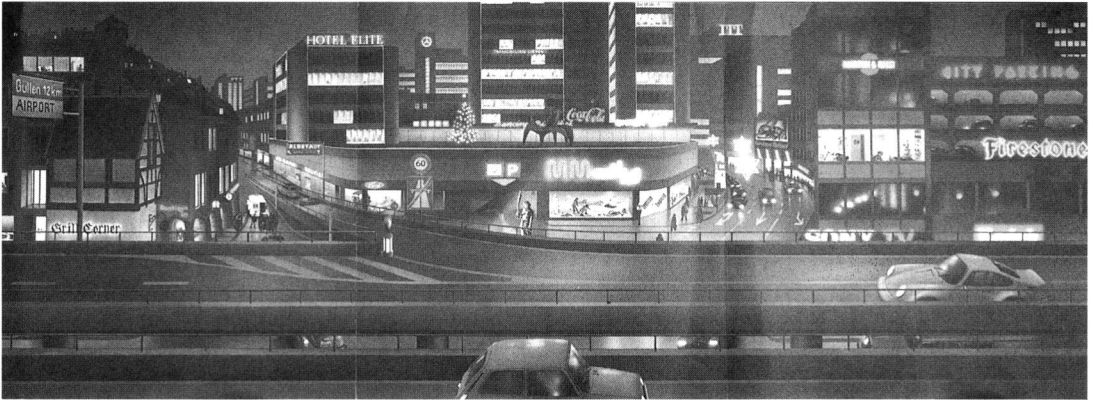


Fig. 16 1976年1月7日の同一場所

た。

“CONSTRUCTION AHEAD DANGER
PASS AT YOUR OWN RISK.
G. HW'Y DEP'T.”

「このさきこうじちゅう きけん
どうろかんりふ」

日本語版では、なんと“PASS AT YOUR OWN RISK”が省かれているではないか。なぜこの1行が削除されたのか。最初はこう思った。小さい絵本の中の小さい看板の中にたくさんの文字を入れるのは煩雑だからではないか、と。しかし、次の瞬間「いや違う。別のわけがある」。

アメリカ版では、工事中の道路では一方で「まわりみち」を示して安全性を保障する方向を明示しつつ、他方で「自分の危険負担を覚悟して渡ってもよろしい」ことを示している。それに対して、日本では、「市民の危険負担覚悟での通過」はいっさいありえない。公共工事の事故発生は、すべて公共側に

帰せられる。

考えてみると、公共空間の管理、及び工事そのものの危険管理をめぐって、日米で価値観が全く異なることが、訳者をして、また出版社をして、このような訳文上の配慮をさせたのではないだろうか。

かの国では、開拓期以来、自分で周りの環境を開き、危険負担を自分で背負ってきた市民生活の歴史がある。憲法には、自分の身を守るためにはピストル保持も合法であるとするくらい、リスク・マネジメントにおける市民の自覚と責任意識は高い。

わが国では、公共空間の建設中の管理はもちろん、利用過程における管理も全て公共まかせにしてきたが故に、管理責任をたえず追求される公共側は、硬い画一的な公共空間づくり・管理に傾斜しがちである。

状況に応じて具体的に判断すべきことではあるが、これからの都市における公共空間（道路、公園、川、池等）形成においては、地域毎に個性あるデザイン

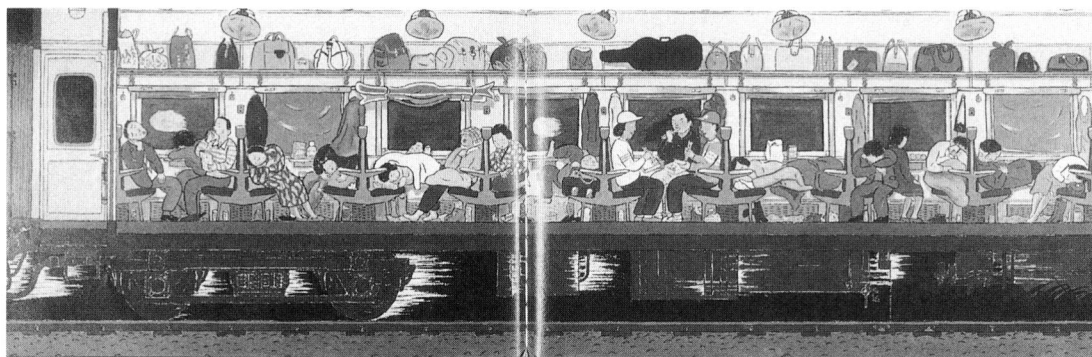


Fig. 17 『やこうれっしゃ』の中

や植物など生命をはらむものがまといつく仕掛けをすることが重要になってこよう。その際、問われるのは、リスク・マネジメントのありよう、及び、ユーザーのよりよい環境づくりへの自覚と責任のとり方やモラルである。この絵本の1ページの中の1こまの看板の表現を通して、かくも深い環境形成・管理のありようを考えるメッセージが放たれているのである。

絵本を解読することは楽しいことであり、そして、絵本から環境づくりにとっての本質的なことも触発されるのである。

7. 楽しい仕掛け絵本

交通機関や道路建設機械は時代とともに発達する。時代とともに役割をおえるそれらへの愛惜の情をおしむ絵本が少なからずある。

パートンの『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』『マイク・マリガンとスチームショベル』¹¹⁾はその代表的なものであるし、わが国でも『きかんしゃやえもん』¹²⁾は子どもたちに人気のある絵本である。また『もりたろうさんのじどうしゃ』は、あっちこっちガタガタで、たえずオーバーヒートするおんぼろ車をめぐる物語として、そして車にのる快樂を伝える絵本としては特筆すべきものがある¹⁴⁾。

都市が生き物のように変わる中で、生活空間としての道路が、高速道路主体の非生活空間に変容していく姿を、ものの見事にリアルに描ききった絵本として、イェルク・ミュラーの『変わりゆく町』¹⁵⁾は見逃せない。1953年5月6日から1976年1月7日までの間を、3年きざみにある街角の光景の変わりざまを描いた環境絵本の意味することは、すでに別のところで述べたように¹⁶⁾、コンクリートで改造されためくるめく〈未来都市〉の出現が、生活者にとって

住みづらさをかこっていることを留意したい (Fig.15、16)。

自動車も自動車も、それらは人々にとっては臨時的な生活の場である。絵本には、もののセクションをすっぱりと切ってみせる表現力がある。その点では、『やこうれっしゃ』¹⁷⁾は、お弁当を食べる人、くたびれきって眠る人等の様子を、端的に伝えてくれる (Fig.17)。またドイツの絵本にこんなものがある。9枚のパネルの表は、列車の表側を、その裏面には列車の中の様子を断面的に描いてみせ (Fig.18)、自分の好きなように列車のつなぎ方を楽しめる9つの大型ジグソーパズルになっている、ある種の仕掛け絵本である¹⁸⁾。

仕掛け絵本には、ポップアップ型やパノラマ型等があるが、イタリアのブルーノ・ムナリーは、トレーシング・ペーパーを何枚も重ねて透かし絵の手法で都市空間における交通の仕組みを楽しく示す絵本をつくっている¹⁹⁾ (Fig.19)。

透かし絵の手法としては、スウェーデンのクリエーター集団「スプラール」の『車の本』²⁰⁾ (Fig.20)が注目される。パトカー、ゴミトラック、消防車、救急車、ショベルカー等、男の子も女の子も車好きな子はみんなこの透明ページ絵本で車の解剖等を学

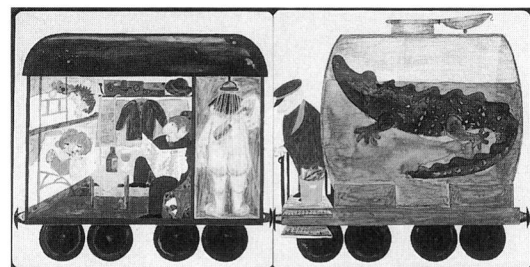


Fig. 18 9枚のジグソーパズル風の絵本—列車の中の意外な様子を楽しめる

ぶことになろう。

交通絵本の楽しい仕掛けは、世界一長い絵本といわれている『ザ・トレイン』にみられる²¹⁾。泥棒が走る列車の中に逃げ込み、ページをめくる毎にそれを追いかけることになり、そのうちに次の駅に着くという荒唐無稽な絵本(Fig. 21)。計32台の列車は横に

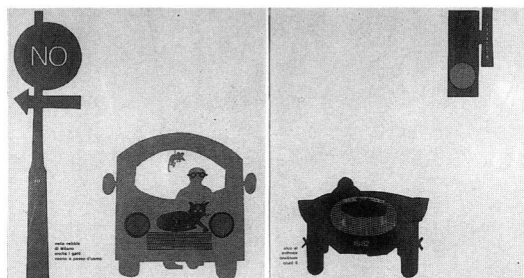


Fig. 19 透かし絵の手法の交通絵本 (イタリア)

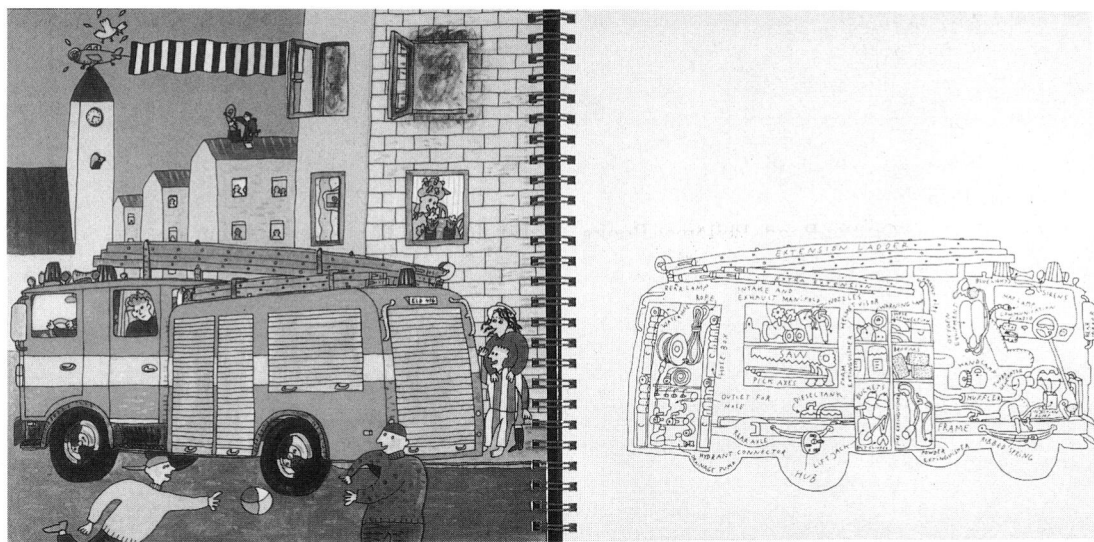


Fig. 20 透かし絵の手法の交通絵本 (スウェーデン)

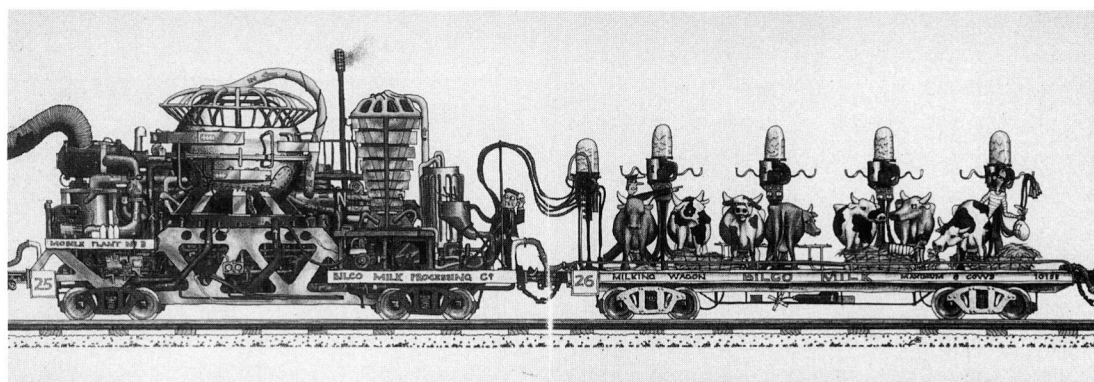


Fig. 21 泥棒が走る列車の中に逃げこんだー世界一長い絵本

広げると5m32cmに達する。心優しい絵本である。

8. むすび

絵本の世界を涉猟することは楽しくて仕方がない。交通について素人である筆者が、「絵本にみる交通」のタイトルをいただいて、手元に及び周りにある絵本の中から交通ものを引っ張りだしてきて、典型的なものについて多少の解説を試みてみた。そのワーキングの間中は、絵本の世界と交通の世界を自由に往還する独特のワクワクする気持ちにかりたてられていた。しかし、交通そのものについての解説の間違いがあつたり、及びこの方面の絵本で重要なものが落ちこぼれているに違いない。御指摘・御指導下さると有難いと思う。

日本の絵本にも視野を広げてみたが、見るもののイメージを触発してくれる絵本は相対的に

海外ものに偏っていた。このことは、何も日本の絵本作家や出版社のせいではない。欧米の絵本作家が何気なく都市・環境・交通をテーマにした示唆に満ちた作品を創作するのは、その背景に、市民の側に安定した環境観や都市観が形成されており、そのことの反映ではないかと思う。

もしそうだとしたら、交通環境形成において全体としてはモノづくりに傾斜してきた今までのやり方から脱皮して、絵本を通して小さい頃から「こんな町に住みたいナ」の想像力を高める優れたオリジナルな環境絵本・交通絵本の創作といった意識づくりの仕掛けを、学会などの専門家側から提起してもよいのではないだろうか。その取り組みの中に絵本作家や多彩なクリエイターをまきこみつつ、わが国独自の交通まちづくり絵本が生まれることを願ってやまない。

参考資料

- 1) 延藤安弘『こんな家に住みたいナー絵本にみる住宅と都市』晶文社、1983年
- 2) Piero Ventura : Book of Cities, Random House, 1975
- 3) Huck Scarry : On the Road, Philomel Books, 1981
- 4) Huck Scarry : On Wheels
Huck Scarry's Steem Train Journey
Huck Scarry's Steem Train Press-Outs
Philomel Books
- 5) 神崎宣武『道の発達とわたしたちの暮らし』さ・え・ら書房、1988年
- 6) 渡辺茂男文、山本忠敬絵『しょうぼうじどうしゃじぶた』福音館書店
渡辺茂男文、山本忠敬絵『とらっくとらっくとらっく』福音館書店
山本忠敬文絵『はたらくじどうしゃ①②③』福音館書店
山本忠敬絵『ずかん・じどうしゃ』福音館書店
- 7) 渡辺茂男『絵本の与え方』日本エディタースクール出版社、1978年、pp.16-18
- 8) バージニア・リー・バートン著、桂宥子、石井桃子訳『ちいさいケーブルカーのメーベル』ペンギン社、1980年
- 9) 松居直「バージニア・リー・バートンの人と作品について」『初茜』第5号、熊本子どもの本の研究会、1988年、P. 70
- 10) バージニア・リー・バートン著、石井桃子訳『ちいさいおうち』岩波書店
- 11) バージニア・リー・バートン著、村岡花子訳『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』福音館書店、1961年
バージニア・リー・バートン著、石井桃子訳『マイク・マリガンとスチーム・シャベル』福音館書店、1978年
- 12) バージニア・リー・バートン著、石井桃子訳『はたらきもののじょせつしゃけいてい』福音館書店、1978年
- 13) 阿川弘之著、岡部冬彦絵『きかんしゃやえもん』岩波書店、1959年
- 14) 大石真文、北田卓史絵『もりたろうさんのじどうしゃ』ポプラ社、1969年
- 15) Jörg Müller : Hier fällt ein Haus, dort steht ein Kran und ewig dront der Baggerzahn oder Die Veränderung der Stadt, Verlag Sauerlander, 1976
- 16) 延藤安弘「変わりゆく町」『太陽』1984年5月号、平凡社、pp.41-51
- 17) 西村繁男『やこうれっしゃ』福音館書店、1980年
- 18) Ursula Zanda : Eisenlokomotiv Verlag Schwann Dusseldorf, 1985
- 19) Brune Munari : Nella Nebbia Di Milano, Emme Edizioni, 1968
- 20) Goran Uggla : The Car Book, Sprall Stockholm, 1988
- 21) Witold Generowicz : The Train, Kestel Books, 1982